

人という字は、人と人が支えあって立っている。

1979年から2011年にかけて放映されたドラマ「3年B組金八先生」の本編にて、武田鉄矢演じる教師・坂本金八が生徒に人生訓を語るなかで生まれたこのフレーズは、「腐ったみかん」と同様、ドラマの内外を越えて広く知れ渡ることとなる。しかし、言わずと知れた名言となったこの教えは、他ならぬ武田鉄矢自身によって数十年越しに否定されてしまう。2020年9月25日に放映された番組「徹子の部屋」にゲストとして出演した武田は、ホスト役で司会役を努める黒柳徹子に対し、なんと「人という字は支え合っておりません」と明言。それどころか、武田は続いて、漢文学者の白川静の名前を挙げながら、「人」という字は人間の身体を真横からみたものであると説明し、「大」は人が両手を広げて寝ている様子を真上からみたもので、「休」は人が木に寄りかかって休んでいる様子を横から見たものなのだと続けた。これには黒柳徹子もビックリといった様子で、「金八先生」の漢字にまつわる教えがほとんどデタラメだったことを明かす武田に対しては、かつての視聴者たちもウェブ上で悲しみの声を漏らした。¹

では、漢字にまつわる荒唐無稽な寓話を信じてしまった私たちが、坂本金八が言うところの「バカチン」だっただけなのだろうか。否だ。より不気味な問題が首をもたげている。支え合っているのか寝ているのか寄りかかって休んでいるのか。HIとT0が交差しているのか。いずれにせよ問題は、たった二画からなる単純な漢字「人」でさえ、あるいはそれを二本の曲線それぞれに分解した場合においてでさえ、私たちはそれを人間の身体なのだと見做せてしまう点にある。私たちは、もっともシンプルで抽象的な単線にさえ、「姿勢」というかたちを見出し、ひいては「行為」という運動を見出すことで、そこに「意味」たる中身を与えることができる。坂本金八はそうして「人」に充填した内容物から人生訓を引き出してみせたわけだ。線に姿勢と行為を見出すことができれば、単なる線であれそこに中身を与えることができ、それはかくもたやすく上書きできてしまう。さて、この問いが真に不気味なのは、好奇心を以下のように展開することができるからだ。実際の人間の身体をまなざしているときも同様ではないか？

「身体から社会をデザインする」と謳うコレクティブ「HIxT0」による公演「bug」は、筆者にとって、その好奇心の受け皿となるような内容であった。白く薄い長方形のステージの上には黒い直方体のボックスと、赤い円形のクッションがいくつか配置されている。ステージの2つの長辺を両側から挟み込むようにして、互いが向かい合うかたちで客席がずらりと並ぶ。そして短辺の一方には、ひどく透明度の低い大型のスケルトンボックスがおかれ、他方の短辺にはそれと向かい合うようにして、白い壁が立てられており、外周部から発光がにじむ黒い円形の板が掛けられている。やがてスケルトンボックスから1人の演者がステージ

¹ 「武田鉄矢の「人という字は支え合っておりません」に視聴者ショック！」、「Asa-Jo」、2020年10月1日（閲覧時：2022年1月10日）、<https://asajo.jp/excerpt/98128>

へと入場し笛を吹き、公演が始まる。ステージ上には合計5人の演者が集まり、言語を發さないまま動作する。そうしているうちにスケルトンボックスの中にはおそらく2人の演者が現れ、顔を見せぬまま肌色のシルエットを動かす。ステージ上の5人とスケルトンボックスの中の2人はそれぞれに身体を離したり重ねたりの動作を繰り返す、そのうちに黒い直方体のボックスは位置を変え、最後に5人は赤いクッションに倒れ込む。赤い粉塵が周囲に舞い、これにて終演となる。

なぜ、各演者たちの具体的な身体動作について詳述しないのか。その記述の手前で立ち止まることに筆者の興味があるからだ。公演内では演者たちの名状し難い動作が繰り返されていた。手を繋いでいるのか、繋がれているのか。押しているのか、引っ張られているのか。倒れ込んだのか、倒されたのか。指で作られたかたちは静寂を促しているのかもしれないし、カメラを模しているのかもしれない。笛の音こそが声、いや声なき声としての呼吸なのかもしれない。そして、公演前後にそれぞれ配られたハンドアウトに並ぶ言葉はどれも雄弁で、ただちに演者の動作に別々の意図を上書きするが、そうであるからこそ、いずれも公演とは無関係なものにも読める。筆者が興味をもつのは、出来事に対する言葉の届かなさではない。たとえ出来事の語れなさをわざとらしく言葉のなかで再演するにしても、「名状し難い」動作に「姿勢」が見出され「行為」が語られ、それに伴って発見された「意図」という中身がいったんは演者の身体に埋め込まれる。言葉の届かなさが確認されようともそのたび繰り返される、この営みだ。「人」という字に中身を与えるようにして、私たちは、実際の人間の身体に中身を与えている。坂本金八の罪はここに繰り返されるのだ。

人間の身体にかたちとしての姿勢を、ひいては運動としての行為を見出せば、意図という中身をつくることができる。この手続きを記号に対しても擬似的に再現できれば、たんなる線にすら意味という中身をつくることができる。逆にいえば、私たちは字の意味を偽るようにして身体の意図を偽ることができてしまう。

冒頭で述べたように武田は、かつて坂本金八を演じた際に語った「人」という字にまつわる人生訓について、それが誤りだったと振り返りつつ、「人」に対する適した見立てを「大」「休」と並べて改めて説明した。「人」は人間の身体を真横から、「大」は人が両手を広げて寝ている様子を真上から、「休」は人が木に寄りかかる様子を横から見たものであると。興味深いのは、意味の元手として発見される「姿勢」が、視座の提案とともにあることだ。視座が変わってしまえば、見出されるかたちとしての姿勢もまた変わり、ひいてはその運動としての行為も、そこに埋め込まれる意味も変わってしまう。坂本金八はまさにこの条件を利用して、偽りの中身を「人」に充填したのであった。視座の変更がかたちの中身上書きする。この可変性は、武田にとっては法螺話を挿入する隙であったが、身体にとっては埋め込まれた意図をキャンセルするチャンスだ。

であるなら、この公演には客席の構成とスケルトンボックスの構造の2点によって、「意図のキャンセル」と「プライバシーの保持」とのせめぎ合いが、ふた通りのジレンマとして並置されているのだともいえよう。

一つ。ステージを挟むように並び立った客席は、複雑に互いの身体を絡み合う演者たちの身体を、それぞれの矛盾する視座に晒している。客席の数だけ担保された視座の可変性は、運動の主体が混ぜこぜになった身体のもつれも手伝って、個々に埋め込まれた意図、行為に期待される目的をもキャンセルし続けることができる。しかしその権利の行使は、プライバ

ートエリアとしての死角を次から次へとまなざしの供物として捧げ続けることと不可分だ。字や記号のように固定された視座から読まれることを回避するため、身体は、暴かれる必要のないプライバシーを自ら暴き続けなければならない。読み込まれた中身を上書きし続けるため、ときには他者の身体と絡み合い蠢きながら、鑑賞者の欲望を艶かしく翻弄し続けなければならない。

二つ。スクリーンを張り合わせることで作られた透明度の低いスケルトンボックスは、それに応えるようにして、そのなかでパフォーマンスする異性同士2人の身体を漠とした肌色のシルエットに塗りつぶす。裸体のようにも見える2つの身体は、官能的な興味を惹起させつつも、相貌と輪郭の滲んだ視界のなかで死角をも担保し、身体のかたちが直接に語られ、中身を上書きされることのないプライバシーを保持し続けている。しかしそれは、スクリーン越しであるという制約上、視座を平面的なものに統一化し固定することと不可分であり、その権利のなかで試みられるパフォーマンスは、長方形に切り取られた画面のなかでも視認しうる記号、人文字のようなものに近づいてゆく。

HIxTO「bug」には、客席に挟まれた長方形のステージとスクリーンによって切り取られた長方形の視界というふたつの「鉤括弧」のなかで、意図-意味を可変-保持せんとする身体のみだ。ふた通りのジレンマがおかれている。このふたつはそれ自体が、私権制限と自己責任論のあいだで揺れるパンデミック下の生活のメタファーとしてもみることができるのだろうが、そのような状況論は二の次として、筆者はあくまでも字と身体の不気味な比較としてこの公演を記憶しておきたい。

「bug」に表れているふた通りのジレンマには、身体というかたちをもつ「人という字」が、二つの権利のあいだで揺れながら、それぞれ別の極に傾いた様子が示されている。

一つ目は、かたちの解釈の権利である。定まった視座から観察される姿勢と、それが埋め込む定まった意図とのあいだに挟まれることで、行為は一貫性に束縛される。解放されるためには、人という字は、死角を暴き、可変的な視座とともに行為の可動域を取り戻さなければならない。

これとバッティングするのが二つ目、かたちの秘密の権利である。プライバシーの秘匿はいうまでもなく個人の権利であるが、他ならぬ身体情報に限ってみれば、それはかたちの部分的な露出を避けることができない。秘密は、死角の保持を求める。身体に向けられた紋切り型の視座を同一の平面とし、それ自体を衝立あるいはフレームとすることで、人という字は秘密を裏に外に隠す。

行為の自己決定、個人情報秘匿の権利。これらはいずれも、身体が各人の所有物であるという社会的な前提をつくる、二つの基礎的な権利だ。けれども身体がかたちとしての「人という字」であると捉えるなら、矛盾し相反する二つであることがわかる。両者は互いに押し引きしている。人という字は、かたちの解釈のために秘密を譲り、かたちの秘密のために解釈を縛る。武田鉄矢が黒柳徹子に語った告白は前者の権利に傾き、坂本金八が生徒たちに語った嘘は後者の権利に傾いたものだ。なぜ、そうするほかないのか。個人が字を占有することはできないからだ。

ではこのように、身体に見出されるたび可変し続け、上書きされるたび発見され保持せんとする「中身」の場当たりの蓄積が、コミュニケーションの対象として信じられている

「人格」だろうか。そうであるなら、私たちは果たして身体が各個人の所有物だとどこまで言い張れるのだろうか。

無数の視差効果が生み出す字のポリフォニーに耐えきれないからこそ、音読して自他に言い聞かせるように「声をあげる」ほかないのだとしたら。そのような間に結ぶことで、坂本金八に言わせたい。「このバフチンがあ！」と。

黒寄想

1988年生まれ、批評家。音声論をテーマに、論考執筆や雑誌の編集、さまざまな企画を手がける。声優論（批評誌『アーギュメント』連載）、Vtuber論（青土社『ユリイカ』2018.7号）、仏教音楽「声明」論（学術雑誌「想文」寄稿）など。現在は国立極地研究所協力のもと、南極・昭和基地についての動画配信・論集企画「国際人類観測年」を進行中。ほか、各種Podcastにてラジオ「ボイスメモ（3600±600）」を毎日配信。